四季艸冬七

内閣文庫
和書
類
二九〇八六號
七冊
一五三函
一八架

和
二五〇八六號
九六函
三架
七冊

内閣文庫
番號 和 25086
冊數 7 (7)
函號 153 292

国立公文書館
National Archives of Japan

四季艸七之巻 冬草

目録

雜事之部

空穂
死籠
弓材 檀 梓
柘 櫨 槻
餝劔
蝦夷鍬先の事
辨慶七ツ道具比事
洗革鎧

甲冑名の考
甲冑問答
母衣問答
武士學文問答
通計十一條

四季艸七之卷冬草

空穂の事 件雄云此條ハ春草下碑空穂の條と照合して見るべし

字はだを空穂と號(ナヅケ)し事ハ。其中空(ウツ)なるして外の毛皮をかけたる躰。粟の穂れどる似ぞばうつぼとゝふなるべし。東鑑卷廿六貞應二年九月廿九日の條 羽壺の字を用ひたる是ハ羽の音と壺の訓とを假用ひて書たるなり。矢の羽を入る壺ぞ。はぐ意得むを却(カヘツ)てうがち過たる說なるべし。又靭の字をうつぼとゝるハ誤れり。本字ハ靫にてゆぎとゝふ字なり。字ばばと靫を形異なれども同なり。うつぼ弓は空穂の字を用ふべし。

伴雄云前ニハ春艸下編ニ説ル事ナリ

土俵空穂を蜷川家より作り出せし物なりしか。蜷川道標ゞ事を土俵に附會したる説なり。前にも記し如く。土俵空穂ハ天文の頃既に有し物なり。其ゝ時ハ天文より以前の事なるべし。然るに道標の始て作り出せしにそ非ず。此事を蜷川家に問ひ試しに。道標始て造り出して。其製式家に傳へあり哉答ふ。然れども其ゝ傳へ誤ることあり。以前より有りしと道標ゝ製式を傳へ来りるゆゑ。それ製式を傳へ来りるべし。

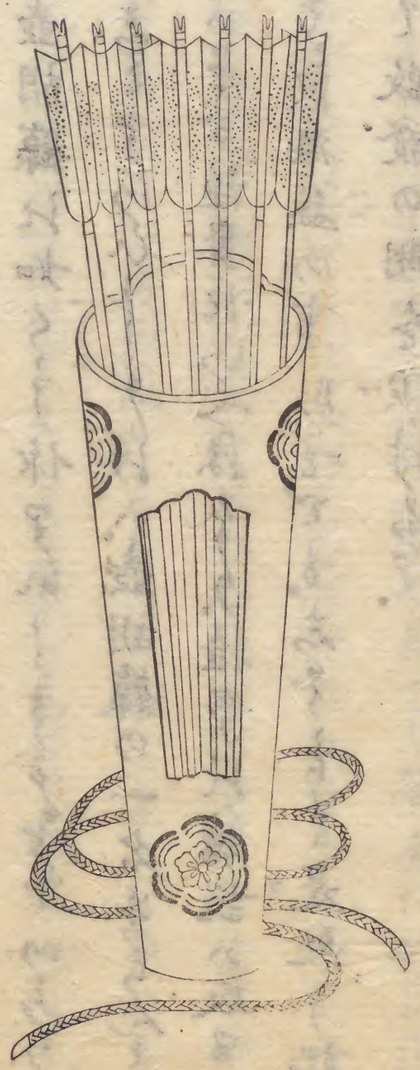
尻篭ゝ事

今世に用ふる所の矢壺ゝ制品々ゝ。然るに古代のゝことをいまゞ見きれば。何ぞ古制ゝ詳なるべ。義經記に。ゝの矢筈下ゝに負ひれしとつくるに據れば。今の矢壺おひゝる躰ゝ筈さゞりにあるべ。古のゝ今のゝ同物と思ふるまゝ。飛彈守惟久ゞ画れし。奥州後三年合戰ゝ繪。土佐光信ゞ画きし一谷合戰の繪などゝ始めし。古代の画工のかける繪ゞゝを見るに。うはゞ付け。箙。壺やなどゝ見えたれ。ゝ負ひしさまゝ見えたれ。ゝ。今ゝ世ゝ用ふるゝゝ似たるゝ負ひし繪ハ曾ゝ見えず。さるべ古書ゝ説んゝゝゝ。今世のゝゝ非ずゝ。右の義

經記なども今の世は矢壺の事とふ定めがたし。
たとへば字は其詞なつきて矢籠尻篭（レコ）れど音訓を假（カ）
て書き来たれども實は矢壺とかきて壺胡籙（ツボヤナグヒ）の事なれ
ばなほらざるべしや。平胡籙（ヒラヤナグヒ）を負へば箭高にはべるべく。
壺やなぐひは箭下（ハズ）されば負ざまぶ矢ぬき
出しがたし。古画なる武者は壺胡籙おびきるまはは箭下
なるべきを見るべし。義經記にもその矢箭下なおひれ。と
いへはも此壺胡籙は事ぶそはるべき。箭下りといへばを
を矢鏃（サキ）を高く箭の方下なるはあらず。箙の矢を箭
高はおひれ。といふに對（ムカ）へるはいと。あるべし。壺やなぐ
ひをなほめられ。とおふはいふ詞なり。
多知なるべしなを。竹矢壺なる太は竹の筒をもりぬ
きて。壺胡籙は如くなる作なれ。きるとやいはらん。
古代なるとはいと。はもはいは。壺胡籙の一名なるとと云
ふ事は予が推量にいへはなり。推量は臆説は取るに
足らざれ無益の事は書をでも。なるべく是（コ）処に記
おきて啟發の期を俟はなるべ。

壺胡籙の圖

此圖ハ裝束圖式ニ見ヘタリ公家ヨリ衛府の官ノ人ノ之ヲ負フ事ナリ



此圖ハ飛彈守惟久ノ画キシ奥州後三年合戰の繪ニ見ヘタリ其一人ノミニテハ物らびなく人もあるを

是ヲ壺胡籙ヤハリ一名ヲ矢壺ト叫ブナルベシ

弓材の事

弓材（キウザイ）といふは弓に作るべき木なり。檀（マユミ）弓・梓（アヅサ）弓・槻（ツキ）弓・柘（ツミ）弓等國史その外古書に見えたり。みな丸木弓にしあるその木の名を以て何弓と稱ふるなり。丸木弓とあるべきをもとゝ事もなく、雨露にうたれ、都（スベ）て木はうるほひを得て折るゝことなし。檀・槻・梓・柘・ぬるでなど、木の性やはらかにして故に是を弓材に定めしなり。継（マヽキ）木弓も上古より有しなり。物ぬるでも木竹を合せにかはにて付たる物なれば、上古は軍に用ひたるを以て、唯（タヾ）的を射る時はもく用ひしなり。又丸木弓はよくしまり堅き物を貫（ヌ）く勢（イキホヒ）ありぬべし。甲冑を透（トホ）ることは便なし。今弓材に取るべき樹を本艸類の書にも探るに、又もく見知りたる人にもあづかり問ひ、其樹を目にも見るに、其あらましを左に記しおくなり。

檀（マユミ）弓

伴雄云此処に檀弓とは事を說たれども、春艸の上巻に擧たるとは全く同じ趣にして、其処なるは弓材の上にはきて說へるなれども、天仁遠波とはあれど、趣意をいまだかつて異なる事なれば、重出ともいふべくなんある。故にこの事書を取捨て、画圖ばかりを擧ふるものぞ。以下梓・槻・柘・櫨・桃・来弓の條これ同じ。但し槻の條をなほ本とはまことに擧しなる。其の事は其処にいとこまかなり。

檀葉並實圖

皮青少し赤あり

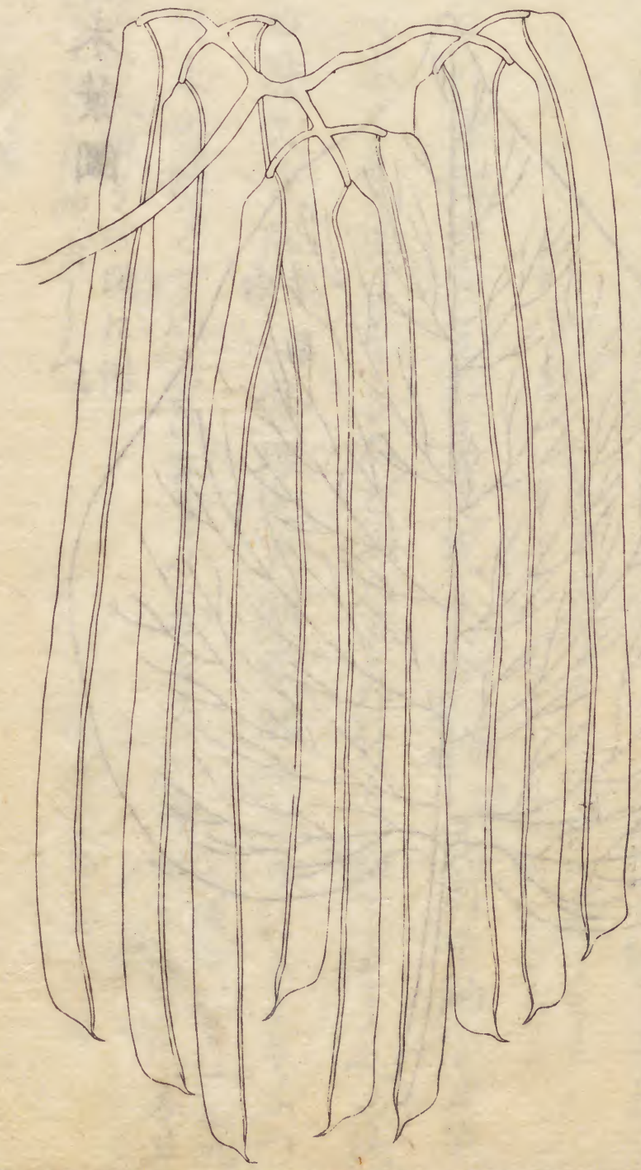
葉少し厚しうるほひあり

梓（アヅサ）弓

梓一名かちら楸（トキ）ともいふ

長八九寸許　これを木さくげといふ

中に毛の如くある物あり



梓木葉圖

葉ハ大ナリ小ナルモ交る

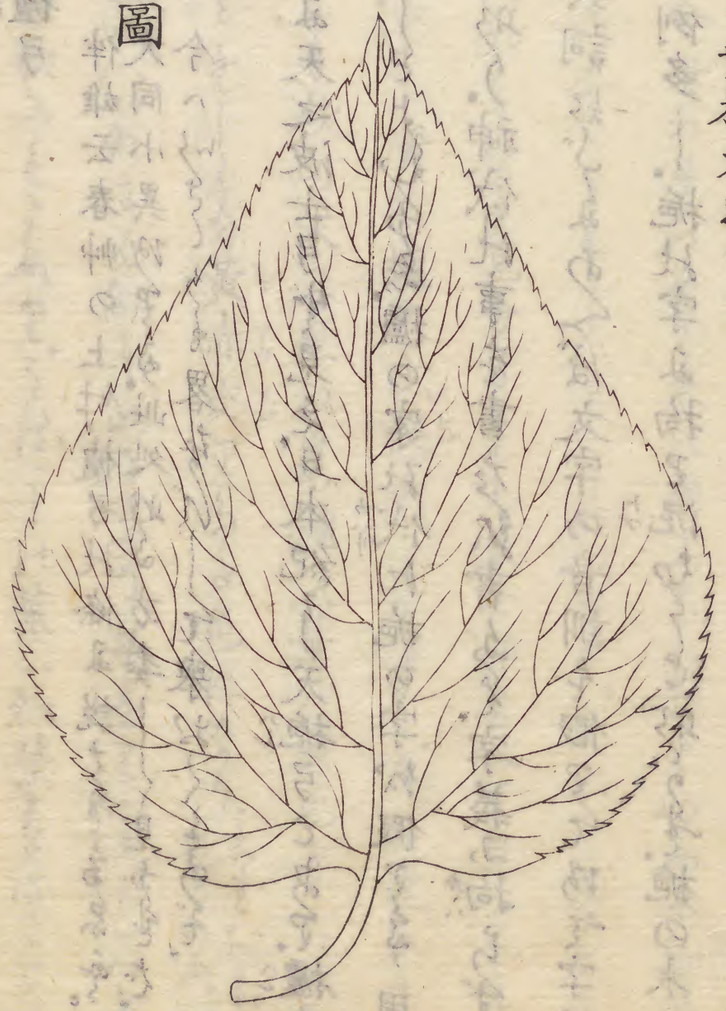
槻弓（ツキ）

日本紀ニ苑（ツクユミ）区由弥ヲ釋紀ニ槻弓（ツキユミ）也ヲ云ヘリ。きと
く音相通ずるなり。はきをつくるもいひしるるなり。是槻（ツキ）木
にて削りて弓作り。太平記抔どにたく打たる弓と
槻弓い古歌にもよみ侍り。夫木抄十題百首木ニ前中納言定家
卿ノ云ヘリ。ヲ弓きるなどゝ同家集戀ニ修理太夫顯季ノ歌ニ
ねの片えだ。
きれ木の法きせぬちひろをおろしへ。伴雄云以上社文此処ヲ引テ春草
の上ゆる。槻弓の段に泄
きたるを抄出し。

槻木葉圖

槻和名抄云和名豆木乃木唐韻云木名堪作弓也

柘木葉圖



柘弓

柘の字俗にはぜのきとよむハ誤なり

はげた黄楊木形也

櫨弓

伴雄云春艸の上大同小異なれども此処なる方委しく見あきたり今ハ略しるす事なくして舉おくなり

古事記に天之波士弓矢見え日本紀に天梔弓とあり櫨も梔もたゞとよむなり櫨の字は代に梔の字は假借なり用ひきなれり神代は事を書たる書なり字義に拘らずして其詞にぞあんべば文字の音訓を假借ていて字に書なる例多し梔は字に拘ると泥むなり梔の木ハ弓に作るべき木にあらず櫨ハ弓材に宜た木なり和名抄漆色具に文選注云櫨落胡反和名波迩之今黄櫨木也と見えたり

波迩之をいふを中略してはじかもいふなり古歌にハ皆たゞとよめり俗にはたゞぜは木といふはたゞぜは轉語なり今世の弓は木に用ふるいぜといふ木即是なり櫨の木は能似たり身木も葉もうはゝは如くにして見分ぶるゝ葉を那らべて見るぞうるゝ少し廣く櫨は狹きゞ多の違れし秋の末に至れば櫨は葉ハ黄色なり其の後赤きを黄赤交なる色になり赤色といふ鐙にはたゞは白ひとしなり是なり終には紅なるなり是をそゞもみぢなりと古歌にもよめり櫨は葉ハ紅葉するなり

く。只枯色(多ガ色カ)なるもの。紅葉すれども紅葉せぬもの。てもぐとうるし。れ分ちを見わかる。櫨(ハジ)紅葉(モミヂ)の歌。夫木抄百首御哥。順徳院。一目見しもちの村雨たぐひなく。ぞはるもちぐれて秋風ぞふく。又同抄文應二年毎日一首中民部卿爲家。ちりぬる山ちぐはく嶺ぬるを木にぬるもの秋しもぬるぐもみぢうれとよもぎ。ぬる外もまた猶多ふ。

櫨に二種あり。同じ樣なる木にも一種も山もぜもい。身木のびらかにして曲り多(ヲガ)らず枝もげらず。一種も身木ひびあらかにして曲り多く幹(ミキ)木ふし多く枝もちげし。弓に引づるにも山もぜを用ゐる。山もぜ一名しもぜもぜともいふ。

櫨れ木を切て見るに。其切口はもとは白くして心(シン)も黄(キ)なり。其心れ黄なる処を取て弓に削(ジ)る。今世の弓れもそれ木に用ゐる。其心の黄なる処なり。木の切口徑(ワタリ)四寸ぐなるも。其心れ黄なる処を徑(ワタリ)一寸ぐらいもとれば。弓れ削ぬるに木のふしをきをそらぐ切ぬぐし。心の黄れる処を取ていなしへも染くさにして黄色を染う。天子の御袍黄櫨染(クワウロジメ)と。いふも其そめくさ。黄櫨(キ)を用ゐる。其染くされ分量。延喜の縫殿寮式に見えたり。

檀の木の葉圖

是ハちひさく画きたる時の葉の大サ次の圖の如し

うらの葉よりハ少薄き方なり漆ハ少厚し

右ハ葉の形生の葉ともを側におき

世人事ぞの樹木なぞたくさん見知り置ばき事なり庭な

ぞなり植置たきもの

桃弓の事

桑弓の事

十張弓の事

伴雄云右の三ケ条ハ春艸の上ハ既に記されたるを復此処に重出せるなり故に削除

きつ

餝劔の事

凡太刀に餝りをなす。然るを餝劔と號するもの一種なり。何ものに是を限りて餝劔とも名付くるやを考ふるに餝劔は木刀又は鈍刀を用ひ其外面ばかりを真劔の如くに餝るゆゑ也故なり。是は儀刀といふものにて多く威儀を助くる為にて武備に用ゐるものは別なり。おほよそ官に文官あり武官あり。文官とは治世の事をはからさぶらふ文道を以て仕へまつる官をいひ。武官とは非常の乱を鎮むる事なつかさどり朝廷を守護する事を以てはたらきまつる官をいふなり。文官は太刀をたく事なく武官は必太刀を帯びるものを定めたる法なり。又文官にして武官を兼ぬる人は太刀を帯ぶべきなり。又武官を兼ぬるいとの大臣なども威儀を助けんが為に詔して太刀はく事ありしかるに事なり。是を勅授帯劔といふなり。此勅授帯劔の人を文官にして武官にもらるゝ故に木刀又は鈍刀を真劔の如く餝りて成して帯せらるゝ是を餝劔といふなり。土御門大納言通方卿の餝抄に古物餝劔大略木也と記したまへり。木也とは真刀を用ひずして木刀を用ふるものをいへばなり。かれ通方卿は暦仁元年五十五歳にして薨じたまへり。されば頃既に木刀を用ふる事ありて真

刀を用ひしもの。古物大略と云て古今は變をわらはし記
きたしたる。大畧こそ古物あきらく木刀のごとくもあち
は鐵刀もわたしもの名よ然しかるに鐵刀も鋭刀まで
あるべき鈍刀を用ひしわり。其證は予ぞ友橘嘉樹と申す者
京都へ上りし時。廣橋家に代々傳へる所の。真楯公房前公は
子の餝劔を請ひ奉りて拜見して。其圖を寫しとて来て
しを予も亦傳へ寫しぬ。かは真楯公の餝劔は刃を名作な
りやと嘉樹に問しよ。鈍刀なりとわるし答へしきまを餝
劔を上古なれ。木刀又は鈍刀を真劔は如く餝るとよつて餝
劔と名ばくるの證なり。後代は及びては鈍刀木刀れどを用

ひばくしるる鋭刀を用ふる事ふ形りしもの。餝劔と云
ふ名義はぐらならぬやうにあるまは。是故實は違ふ
ぶ由なるべ。
餝抄を數本見るに。古物餝劔大畧木也といふ文は也の
字は土偏を加へる地の字に作る本もわり。又は木地
也と書たる本もあり。こはいづれも皆傳寫の誤りなべし。
西三條裝束抄餝劔の條は。鞘は大畧木地は由なるせと
わるる。うは餝抄は一本に木地とわるる據りて記し給
へる那り。然はぞもかの一本は。鞘の字は無く木地と
あるまりて。木地はわるる鞘は事なるぞと推量

しるし。更に鞘に字を添て記しおれしを却つてのやまとなれり。是餝劔の餝に字の故實を辨へ知るべきなり。故なるべし。

儀刀とて。右に記したる威儀を助くる爲に帶する太刀をいふ事なり。威儀とは けぶりきよそおひなり。其威儀を助くるに身を餝る理をもて。儀刀の二字をすなわち かざりたち（畧して かざ ち とも云）とよまるる。其義通ぶべし。然れども本と其及び真偽をも出たる事なるべし。

蝦夷鍬先に事

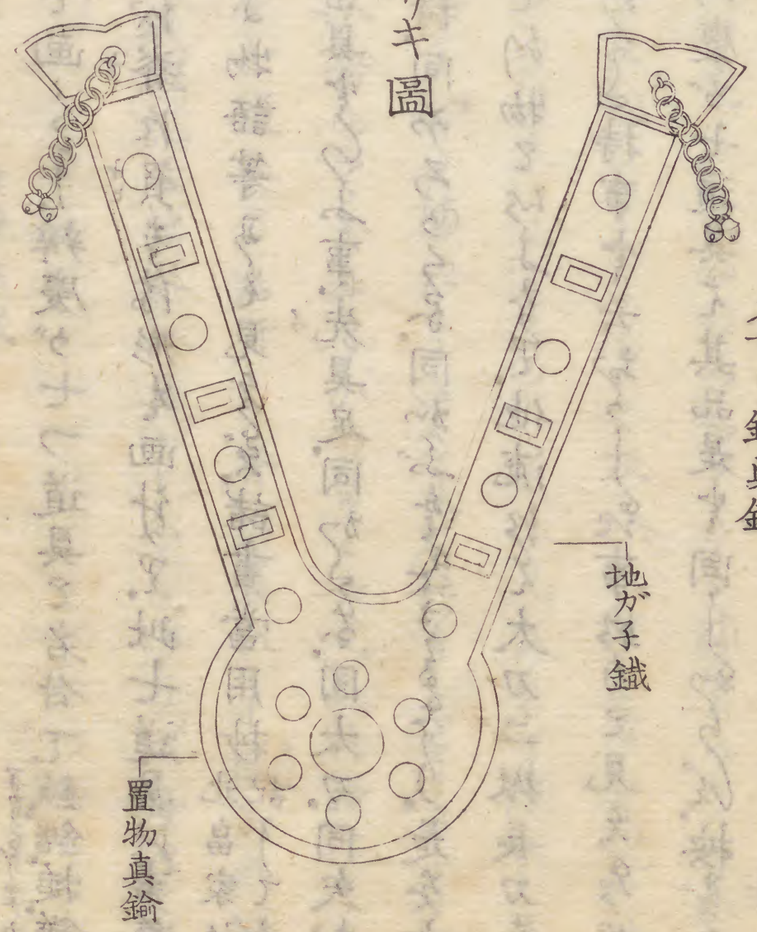
蝦夷の國に人の寶物とくさぐさの物なり。其繪圖を見るに我國の曽に前に立るくさがとよく似たる物なり。かの國に人病（ヤマヒ）に卧しなるとき。枕上にくはざれを立おけば病いやるべきといひ傳へたりとぞ。かのくさぐさの昔源九郎判官義經蝦夷へ渡らるしとき。義經に曽のくさがとのうに地に遺（ノコ）して今にいたるをいへるを妄說なるべし。東鑑に義經を奥州衣川の館にて自害なりしに。其首を斬（キリ）て酒に浸して鎌倉に送りし事見えたり。賴朝卿又梶原景時等。義經を憎むこと甚しかりしかば。贋首（ニセクビ）をもつて受取まじきに。然れども義經奥州にて自害せるとし事疑ふべからず。いまだ詳らかにしかい義經の

くさぐさの物がたり事明らかなり。然るに近世馬場信意といふ者義經勲功記といふ書を造りて、義經を衣川の館にて自害したるなどを紛して潜に蝦夷へ渉りし由を記したり。世人これを其事をいひ好むこと甚だしく、是妄説に惑はされたるも甚だしかりし。按ずるに續太平記此書近世の人の作なれども古き日記を集めて綴りたる物なり。浮花なる事も多くは又取るべき事も多し。應永十八年小山惡四郎隆政といふ者奥州にて亂を起す。之に依て鎌倉の執事上杉氏憲討手を下し給ふ。諸軍小山が城を圍て攻む。隆政勇を奮ひ圍を破て津輕に奔り、それより蝦夷に渡り、かの國にて武勇を振ふ。後ち蝦夷人等怖れて從ひ、後ち蝦夷國の酋長が婚にあひて天命を以て終り、それ

ども崇敬して祠を立て祭る。其祠今に在り名ばかりなるきいふと見えたり。是に據りて思ふに、かのくさぐさの小山隆政が曾れくさぐさがたりしくさぐさをくはすぎたるといふの昔奥州の方言なるを蝦夷にもうけ傳へて云へるなるべし。蝦夷の人も日本の物をば何によらず秘藏する風なり。古き闕け椀の類なりとも寶物として納め置く由蝦夷の事記したる書に見えたり。然れば隆政がくさぐさを神物として尊崇するはもとなるべき事なり。うの義經勲功記の妄説を傳へ聞て、松前の人なども義經

蝦夷渡アル事を言ひ慴ナラ[illegible]かれ蝦夷のうなぐ[illegible]を以て
強シて義經の祠を[illegible]するなり。又近チカ蝦夷ヲ辨慶崎ヲつふ處ありて
[illegible]。此名も蝦夷の詞にあらず右れ義經の縁ゆよりて松
前より名付[illegible]名ゆるぶし

蝦夷クハザキ圖



辨慶七ツ道具の事

辨慶が像(カタ)を画くに。辨慶が七つ道具と名付て。鉞(マサカリ)。鋸(ノコギリ)。提鎌(ツチカマ)。くまで杯の類を脊(セ)に負(オヒ)たる形を画けり。此七道具の事義經記其外古き物語等にも見えず。諸書當用抄(北畠家の記)にて古書れたし。七道具といふ事。先(マヅ)具足。同かぶと。同太刀。同矢おふなり。同弓持。同ほろかくる。同かぶとをきるなり。是を七つ道具或ハ七ツ物ともいふなり。他流にハ太刀二振長刀なども入物はかるき持事也云おろし此事なりと見えたる也。然れども辨慶が七道具ハ其品是も同じからず。按ずるに義經記(住吉大物二个所合戦の条)に。むさし房ハ弓矢をも持ざりけり。四尺二寸ありけるいかものづくりの太刀をはき。岩とほしといふ刀をさし。ゐのめゑりたるまさかり。なひ(薙)がま。くまでを舟にからひしりと取入て。身をはなさず持たる物をいちゐの木のぼうの一丈二尺ありけるに。くろがねふせて上下にある所入たるに。石はましたるをとり纏にたばさみ小舟のさきにそびのると云々。此物語によりて色々の物を七道具と名付る脊に負ひし様(サマ)に画けはなるべし。義經記には脊に負しにもあらず舟に立ていましけれど。

洗草鎧の事 付洗糸威

洗草鎧と古き物語に見えたり。是洗草を以て綴りたる鎧なり。すべて草威は薄き草を細く裁ち両の端を折て中にて合せて推し平めて威にたり。初め草はよく引延し置て右の如く折なり。近世は折ずして威にゆる。両方は裁ち白く見えて見ぐるしく。又鞭草なるゆゑのびやすくてろし。今世洗草といふ白くやすらかなる草あり。是は古へ洗草なるべし。物語は古へは洗草ハうに紅み染ゆるはやすらかなる草の事なり。そは證は。保元物語の異本義朝幼少の弟共被誅條に。三人は君達各西に向て手を合せ禮拝しけるぞ哀なる。是を見る五十餘人の兵も皆袖を絞濡すとは。其中に波多野が緋威の鎧は袖を洗草とや成ぬらんと見えたり。此文印本無之是か泣く涙を

て緋威の袖を洗ひそがしてと色うるはき草にはるべしと
いふ意なるべし。次紅の草を洗草といふはるを如此いく
るべし。公家衆は傘袋皆あるべ持つ下部の著る布は狩衣
をうに紅に染るを退紅といふ。退紅といふは濃く赤く
て真の退紅なり。退紅と書てそるをもてぞくるとよむ。紅
は色を洗ひそがしてて退けるる意なり。此退紅の二字は
はらそえと訓をあらひ草なり。是は畧語なり。すべて紅の草
をあらひ草といふも是と同意なり。は退紅は名を
江家次第。延喜の縫殿寮式。其外古記。裝束抄等にあるを見
えたり。日本紀天智天皇は御巻に。桃花布。衣服令に桃花衫。

延喜の彈正臺式に桃花布袗。萬葉集に桃花褐あげたる。是等これ桃花の二字をよらぞめを訓来れり。桃花の色ハ薄紅なるゆゑなり。紅の色を洗退けたる意にて。あらひぞめといふべきを畧してよらぞめといふ歟。又西宮記に。相撲御覽日相撲長并立合等著洗染布袍云々。これ文を江家次第に相撲長左右二人退紅袍と記されたり。こゝらの文を以てよらぞめハ洗染の畧語なる事を知り。洗染をいふを退紅（タイコウ）ハ事を知らぬ。又江家次第に荒染と書たる所もあり。是をあらぞめとよむ詞に付て荒ハ字の訓を假りたるなり。古書よりかやうの例いと多し。右に云へるあらぞめハ洗草の事を悟り知るべし。今世の人多く右の故實を知ずして。洗草をいふハ水に草ハ洗草の事なりとて。洗草をいふハ水に草を入て洗ひあるやうなる白き節用集に。節用集ハ饅頭屋宗二が作なり。宗二ハ林氏名公の弟子にて哥をよくせり。洗糸威（アライイト）と畧して洗糸威（アライイト）といふ。すべて紅に染たる糸を以ておどしたる鎧なり。

甲冑名の事

かぶとをいふ。ひの古名なり。日本紀崇神天皇紀

御卷子。時人號其脫甲處曰伽和羅と見えたり。又古事記仁
德天皇の御卷に。以鉤探其沈處者。繫其衣中。甲而訶和羅鳴故
號其地謂訶和羅前と見えたり。右の伽和羅も訶和羅も其
によりて此事を以て名付たる。又日本紀仁德天皇御卷
於考羅濟と見えたる。此考羅濟即ち古事記に見えたる訶
和羅前の事をいへはなり。考羅ハ訶和羅の轉語なり。轉語と云
ハ詞のひゝきにて
かはるをいふなり
よりひを上古かわらといへる。かわらをからと訓の略語み
て。畧語には長き詞を約て短くいふ事なり。又轉語なり。からハ殼なり。あるハ開
なり。草木の種を植て後。其苗は生ずる時に必其殼をぬけて
芽を生じ。芽は頭に殼をかぶりて生ずるなり。此義を以
てなるべく堅き物をこのぬる物をかわらといふ。龜のから
からの轉語なり。屋の上はかわら。人のきるよろひをもかわ
らといふこれ同じ意なり。からをるはらの字を中畧し
るの音を轉じてらの音をなしてかわらといつなり。かと
らをかとらと書は非なり。日本紀古事記にはかの字を用
ひしなり。わは此字なり。瓦の字は訓を和名抄み加波良と書た
るは誤なり。瓦も甲の義なり。加和良と書べし。又和名抄み
相摸國の郡名愛甲ふ阿由加波と訓を付たり。これも加和と
付べき歟。和名抄にも
をり〳〵如此の誤あり。
吾が國のかからわるの義を以て名付たるにあらず。西土みな
も亦同意なり。甲の字篆書にはなを中如此なり。說文中の

字の註ふ云。東方孟陽之氣萌動(キザシ ウゴ)して木戴(ノル)孚甲(カフタ)之象(カタチ)を見そなう。此註は意も甲ハ東方より春の初、は陽氣萌(キザ)し動(ウゴ)くなり。故に⊕の字、木の實草は實春は陽氣を得て土中より出生にるなり。其からわるをて芽(メ)を生じ、そは芽の頭(カシラ)殼をいくべきて生出たる形ふ象(カタ)て。⊕の字を作てるを也。上古文字を作るに六書をて六品の法あり。⊕の字は如き也六書の中の象形をいふ作りやすし也。其の⊕も殼(カラ)のてきたる形(カタチ)丁ハ芽は生出るの形なり。芽を生ずるの義を以てふ甲乙の甲こし。孚甲を戴くは義を以ては甲冑(カツチウ)鱗甲(カラ)等の甲をいふなり。然るに殼からわるの義西土にるも吾國にても同意なり。

かからを生いふそからわるは義にて。木の芽はからをいくべくにてをいふからば。かぶをてをかからを生いふべけをもかわをんと心えんを穿(ウガチ)る説にて偏屈頑愚(ガングイ)の至なり。既み古事記は衣中甲(コロモノカウ)をいるは衣中ふ著るよるの事をいくるれり。龜の甲も頭みかぶをば脊と腹とを包めて。かわをといふはをく大やうにをかからをは惣名也。心得違(カ)つぬるを頭のかからみをよるは胴のかを殼也。

からをは事はをいくるを也。近世は事はをあらからは事はをいくるを也。源順の和名抄に。甲は字を出にて唐韻云鎧五蓋反和名與路比と

見えたり。源順は六十一代村上天皇の御代天暦年中の人なり。其頃ふたやくかうらの事をよばれといふなり。甲又鎧等の字かわらに本訓なりとろもを擬訓なり。訓ハ文字のよみをいふなり。本訓とは何れ字にも其字のもちはんへはよみをいふ。擬訓とは其字の持まへのよみにはらぬれども義理通ぶるを外のよみをいふれ。擬の字をあてがふとよむなり。又義訓ともいふ。義理通ぶるを以てなむなり。日本紀齊明天皇は御巻に鮒旗二具とある二具の字をふさよるなむ訓来るなり。又源氏物語に移すもの（置物）ばこふたよろひ云々。榮花物語にも御てはこ（手箱）一よろひ云々。義経記に屏風一よろひ云々。何も一具二具とれふ事なり。よろひとはよりそろひ累語にて寄齋（ヨリトヒ）なり。

具の字ハ共にもとよむ。物の彼（カレ）と此（コレ）と共に寄ぶそろふをいふなり。甲もかぶと共胴と籠手すねあてはれ類寄ぶそろふるを以ていふなり。軍のよろひといふべれを軍れ字を略してよろひとれを略れり。

鎧（ヨロヒ）の事は具足といふも具足の二字よろもろとよみ。冑も胴も籠手もすねあても何も个（カ）もよりそろひて足（タ）ぶそろふるをいふなり。俗説は大將の鎧をばよろひ平士の鎧をば具足といふ。又一説は古制は鎧をばよろひ近世は鎧をば具足をいふと。古きは類ハ俗説にて曾て差別なき事なり。其制作（キサク）まちまちなれ。

其名ハ[illegible]もいふ具足を無ものなり。
[illegible]といふ事。信西入道が本朝事始に。或説ニ本朝事始を偽書なりといへ
ども然カブトトハ加布止者以言加布良年止須也といへるを笑ふべき
事なり。[illegible]ハかつらぶたの畧語なり。たの音を轉じて
てといふなり。かつらの蓋といふ事なり。ぬふふくぐ
ふく物を覆ひふたぐれ義なり。
よだれかけを古代の書にはあかべのよだれといふ。日本
紀欽明天皇の御巻に。頸鎧の二字をかうがいと訓来
なり。釋日本紀に。頸鎧を與多利加氣といふ物なりといへり。
かうがいとはあぐべの轉語。かうがいはそべの轉みてあ

があぐべかうがいは皆音相通ずるなり。かうがいは通れて音なり。相べとかうがいとハ
ともをいふ。腮邊なり。腮れ字あぐべとも[illegible]なり。邊といふ
なり。邊の字音にあらず訓
なり。音訓自然ニ同
ぐく合するなり。よだれかけハかうがいれ下りに懸るものを
かうがいのようにといふなり。又按日本紀に頸鎧をかうがいの
なるなりと訓を付なるを誤りなり。既に前に甲の字をかう
がいと訓付なるなり。頸鎧をもあかべれかうがいを訓ずれ
ば。甲も鎧も同物なれば[illegible]べき事なり。
甲れ字かうがいとも。是胴もかうぶとおしなべて[illegible]なり。
廣くいへば籠手もかうがいとも皆甲なり。甲冑と二字連ねて
用ふる時には甲かうがい冑もかぶとなり。然るに俗書に甲

をかぶとゝ冑をよろひとするをはやはり那也。

甲冑問答

或人問云。古代の甲冑は製と今世の製とは大に違たり。はじめの頃より變じ來るとやや。或説ゐ應仁は乱以来今の如くゐなるとゝる事なしかを如何。答云。何の時代と定といふ事をしらざらんに。推量はるに應仁よりもはるか後。天文十二年鐵炮渡り来りし後の事はあるべし。古代は鐵炮なくゐゑ矢軍はしはもあり。甲冑の製も矢をふせぐ防ぐやうに製し。煉革を以て割小札ゐして毛引ふ作りあるをなかうすぐ糸ふく製たるがゆゑにさに。源家重代は鎧うたぐゐと名付て稱美しまるもはるかに古をなかくを草札ゐ子鐵をせるゐ事平家物語れどにも見えたり。鐵炮渡りし後は鐵炮のいきほひ矢よりも烈しきを恐れゐ。甲冑は製を變て札を鍛鐵して作り。或は胴を鐵のはりのべゐぎにして鐵炮を防禦ことを專にするゆゑ。からくはたとく製をぞ甲冑重くなるゐ。冑の吹返鎧の障子は板。せんぐゐんの板。鳩尾の板。逆板。はげまは。ゐやうは板むな金物。ちて金物。小櫻は鋲れどに至るゐで省略し。大袖をも小くれし。腸楯はもそて筒丸の躰をうはしゐ。今世は制をちしるゐて重きをいとふゆ故なるゐし。古製を

威儀実用を兼備したる製なり。今世は専実用と簡便
簡をむさぼりて利方にのみ便を兼て威儀なかるべからざる
を云なり。近製の中にも又變じ来る事もあり。
問云。近製にも又變じ来る事をありとせば何なる事ぞや。答
云。天正慶長頃の制は皆戰場に著して利用を試たる製なる
ゆえ。其頃の胴は胴の内にうつぎ有てあるやうなり。此胴の内
にうつぎあるは大切の事なり。是はうぎあるゆえ久しく著し
ても躰早く疲るまじき故なり。されば太平に世に生れ
なる人古き鎧を著てうつぎなくつぎなるべき事を知
ざるゆえ。此よろひは我身に合ざるゆえ心得てそれ

身にあらしめんと合ふやうに少もうつぎなく作らせるゆ
え。鎧師の方にて乳縄といふ事を出すなり。其は細縄にて乳
通りの胴に圍の寸尺を取て。それを以て惣躰の寸尺をとり
出し。身にひしと合ふやうに作るなり。さて其鎧を
著て見るべし。しかと身に付て軽きやうに覺る故。
是にうつぎなきやうにと思ひ定むるなり。たくみに上手にて
それにてもよかるべきなり。木刀にても木鎗にても持
て仕合をして試るべし。忽に息をづかひて疲るる事なや
のやうなれば。是胴に中にうつぎなくなるなり。又近年諸流の軍學者利方をいふ事な

巧(タクミ)に出し。多く是れ上の考を以て古き製作を改め新作する事多し。されば近製の中にも慶長天正頃に製したるを手本にして作らしむべし。乳縄(チナハ)を用ふべうらば。又軍學者は多くみの上にて巧み出さば利方なも用ゆべからず。又近年弓を引たるとき其外すべて物をぬきぐ爲の臆病道具(オクビヤウダウグ)を出し是を禁。癖をかくふらぬ為の用心はもつぱらも物品多くあれども。又急(イソギ)で著る時は物品多あるを手間ぎれ多遲し。第一すべて物のなれをみたるば身は多くたらきの妨(サマタゲ)なるべし。昔よりなれ物を用ふべうらず利あるが如く好まれども却(カヘツ)て害なるべし。

問云。古代は甲冑は下にもみえば。鎧直垂(ヨロヒヒタヽレ)を著ふうしと いへども。いまの頃なり是を用ひざる事にあらしとみや。答云。是亦時代詳ならず。推量するに是を鉄炮渡せし以後は事なるべし。古代は軍中にも禮儀を濫(ミダ)さざるゆえなれば直垂(ヒタヽレ)を著ずしなるべし。鐵炮渡せてより合戰は勢烈(ハゲ)しくなり。甲冑の製作一變して鐵札を用ふるゆえ。甲冑重くなりしうば。少(カロ)なれは輕き物にもゆえ省略していよ〳〵輕からん事を欲す。えぶしもくれて矢石(シセキ)を防ぐ要器(ヨウキ)にあらば。足手はとひのなれきれ物なる上。甲冑は おもみを増さん事を慮(オモンバカ)て。又陣羽織などを著ふる事もなるゆえ。えぶし直垂は省略せし

あるべき事。古代ハ禮儀の爲に用ひたるを。後代は禮儀なかるべからず。便利をもとめ走る戰國の風俗なり。されども豐臣秀吉公九州出陣の時。赤地錦の鎧直垂著せ給ひ由太閤記やらんに見えたり。是も近代あるべくして事なき。

問云。討死を思ひ定めたる日は冑の緒をはむすびふして餘あまる切きれを又母衣を臺の上にといふ事定法なりや如何。答云。凡武士たる者ハ出陣の日より討死を思ひ定むべし。生て歸るべしとかまへたる不覺悟なり。はるかに今日は討死なるべき日。今日ハ討死せざる日をいふ事ハなるべからず。冑の緒を切る事。母衣を臺に上るとやらんいふ事は人々の好まはるべき事なり。ちらしながら主君貴人の仰を承て。又はるかより物申上るとき必冑をぬぐ事軍中の禮なり。緒を結ひ餘あまる切て捨るべき。急ぎ冑ぬげはべく。又それならぬらんをするにもかぶられまじき事なり。母衣を臺に上る事武田信繁が去初まはる由甲陽軍鑑にあらんに見えたりと。おぼゆ。古書に母衣を臺の上にとゝのふ事曾て見ぬる事なり。古画などにも其躰画たる物あれ。甲陽軍鑑にいふ書も事實相違ハ事なれども取るにたらざる歟書なり。

問云。古制の鎧ハ相引を覆ふ物。左ハ鳩尾の板を用ひ右ハ旃檀の板を用ひて両方同じからざるを如何。答云。此事古書ハ

其故實を記したる物なりなれど何ぞをいふべきなれば今按ずるに凡敵と戰ふには必片身ぬきにして左身を敵に向けて兵刃を執て右手を左の方へ指し出して働くもはなはだなりはなれど右に鳩尾の板を付きれば鳩尾の板は強直なれば屈伸なきもはなはだなるゆゑ其板の端に直垂れ袖小手の袋などを引かけ妨げなきゆゑ右ぬいは鳩尾の板を用ひずして柔軟にて屈伸自由なれば せんざんは板を用ふるなるべし

又問云右の如くせんざんの板屈伸自由なれば利用なる物なるべ左にもせんだんの板を用ぬる事なるに左に鳩尾の板を用ふれば如何答云右は相引の邊は右の手本なれば右の臂は上へ下り働く處なるゆゑ屈伸自由なるせんざんの板を用ふるなれば左の相引は邊は右は手先の働く處なるゆゑ左ぬせんざんは板を用ふれば柔軟にしてひらめき動て太刀打にも搶なるぬも弓射ぬにも却て妨げなれば故左手は強直なる鳩尾の板を用ふるなれば利あるなり

又問云右は方にせんざんの板を用ぬる事利あらざ腹卷筒丸ぬも右の相引ぬてせんだんは板を用ふるは事なるに左右なれば杏葉を用ふるは如何答云鎧の鳩尾板は杏葉なりも其ぬけ長き物なる故右の臂は働の妨ぬなるにより鳩尾板を用ひずしてせんざんは板を用ふるなり杏葉は短き

物にて右の臂れ働のさまるうけみ明らず。さまざま腹巻も筒
丸え同様に左右半面すす杏葉を用ふるあ案。
又問云せんぎんの板は名ハ古書にも見えたり。鳩尾板小
出羽などいふ名を古書ゐ見えず如何。答云。古代せん
ざんの板を明ふを左右の物れ惣名と見えて。もと一具の
物ゐして左右へわるるきるれど。木の芽の一莖にして二
葉なるにを半ん。俗にせんだんハ二葉よりこのもだしと
いふ諺ありて旃檀板と名付しあるべし。両方れ
形違なるよりよるゐ後ゐ左の方なるをバ小出羽とも鳩
尾板ゐも名付て左右のうかちをれしらるあらん。小出

羽も小出葉ゐて出るゐ二葉れ意なる字し。鳩尾ハそれ
形の似きるを以て名付しあるべし。
又問。大袖の水呑れ緒の環の座金物を袖の幅半分ゐ長
くゐる事如何。又何ゐ水呑の緒ゐふいふにや。答云。唯文餅
だかりれきるなり。古れ鎧れ袖ゐれ金物長うちぬも
ゐを。是を以て長きを唯文餅だかりと知るべし。又ぐんの
れ緒ゐ名付事未詳。推量を以ていそ。鎧れあげ
まれをとんだうむすびて袖の緒をぶをんだくむ
きるの横手にゆひ付るあり。蜻蛉ハ水れ上をとむきうち
尾を水にあらして水のむ如くゐる物ゐを。それ縁を

引て水のゝれ緒といふにもやはらむされどいかゞなるしら
ぬ事證據ハなし。
又問。古き繪に武者を画きたるを見るに。左ハ鎧籠手
ぬぎをけり右ハ弓籠手さしたる躰見えたり。弓籠
手ハ左にもそなへたる事を右にもけたる事ハ如何。答云。弓籠手
さしたるハハあらに。鎧直垂を著て左の袖ハ脇くゞ上
る肩の邊にく結留め。右の袖をまくり上ぎして手をもむ
にて。袖くゞれ緒を引ちがへて結び留たる躰を画きたるゞ
弓籠手をさしたる如くに見ゆるなり。
又問。よだれかけハいかゞなる事付たる何の為ぞや。答云。涎懸

ハいかゞなる事付る事古式をふ曾て無れ事ぬり。あげ海ハ
付たゞ弓射るにも太刀打にも何ぞるハもなぎ自れ妨ハ
なるゝ惡しぬ。ぬりれゞ古式ハ無れ事なる代。近世鎧師明
珍ゞ新作して。冑れいげまれ。鎧のあげまゞたりかけ
のあげるきを。三のいかぎなきと称して家の古實なる
いふ由聞及べり。明珍い工匠れ家ぬるば武士のるぎハしら
ぬ。ゆゑ鎧ゐぬぎいふ物を花麗に餝るをとれ事と称も
ひて。涎懸をあげなを付たる妨ハなる事ぬ出らぬして
古式に無事を仕出したるハれ歟。
又問。鎧のおし付ハいかゞまれ逆板あと。是ハ何れ爲ハ付ゐ

まや。ゑび餅だかとゝ付るにや如何。答云。古代の鎧を胴はれ裏を草紙以て張はりて堅く。堅く綴ざるゆゑ胸板も押付をゝ。ゆゑ有て引立ぶ伸び下にする置ハ縮やうにおらゝくきる物なり。脊の方ゑそ肩ぼゝの下邊ゑ一ケ所。横きゝゑ左ゑ右まで一文字に透間を設く。是ハ脊の屈伸を自由にせんゞ爲なり。其透間をふさぐべれ爲に逆板を上より垂を掩ふゆゑ。其逆板の裏より胴へうけて毛引に綴て活ふぎ置ゆゑ。それ毛引ハ一文字のすれゆれ上ゑかゝゆて。逆板を上へ引上ぶかの毛引れ所ゑ伸び。逆板を下へ垂を下れぶこれ毛引ゆるむなゆゑたゆめぶ

逆板がゝゝと動きゆふゆゑ。戰ひ働く時ハ逆板れ後ゆゝらぬ爲ゆ逆板ゑ座金物を打ち環を付け。其環にあげゆれを付て逆板の壓にしきれ物ゆゑ。其壓ゑゆゆゆゑゆゆ。ぎゆきゝ太れ組緒にて総も太く長くきるゆり。是ハ重くせんゞ爲ゆゑ。きて鎧れ両袖前へ出ぶ妨ゑなゆゑ故。袖の水呑れ緒をあげゆきの両方の横手れ引れへ活ゆれ留置ゆり。ゆゆゆれの上れ引ゆゑゆ逆板れ環に付ゆ料。両方の横手れわゆゑ両袖れ水呑の緒を結付べき料なゆゑ。如此三ッれ引れハ必用の物ゆゑ。きゝぶゆぎゆゑゆ付ゆ事何を表し彼を象るゆゑぞこれゆ事を探求ゆり及ざる事ゆゆゑ。此事ハ知らぬ人色々さ

はくれ邪説をいひぬらすたはやすりたり。

問云。古代の鎧ハ胴のきけ甚短きと如何。荅云。古製の胴を今の胴も同じくしけきをもて。古製ハゆるぎの糸付處胴ぎを貳寸ばど上より付るゆゑ胴短きやうにそゆるなり。今製ハゆるぎの糸ハ胴ぎをより付るゆゑ胴長く見ゆるなり。

又問古製の鎧ゆるぎの糸ハ胴ぎをより貳寸ほど上げて付るゆゑ何の爲ぞや。荅云。古製ハゆるぎの糸の長さ貳寸五分ばかりなり。ゆるぎの糸を胴ぎをより二寸ほど上より付る故。胴の下ハ方えゆるぎの糸の陰(カゲ)ゆゑこのくれてゆるゆゑ。

ゆるぎの糸の處危(アヤウ)ハ事れなり。今製ハゆるぎの糸を胴ぎをの端(ハシ)より付け。且ゆるぎの糸ハ長さ四寸ばかりなりて股(モモ)の上にかくるゆゑどみしきハ事なり。ゆるぎの糸ハ陰透(カゲスキ)て何もれく多く糸ばかりをもゆゑ此處甚危し。古製の如くはきをばやうの事れなり。

又問云。古製ハゆるぎの糸二寸五分ばかりをハ長さにて。胴(ドウ)尻(ジリ)より二寸ばど上より付るゆゑ。上帯(ウワオビ)をせぬゆゑぬの糸大方ハ帯にかくられて。草ぼをハあかき滞(トゞコホ)ア歩行の害ゑ出らむ如何。荅云。今世の草摺(クサズリ)ハ裏より草。又ハ布れどをハて出ぬ付るゆ草摺をあがくぬやうに作る。古製ハ草摺の

裏ゑ何もなくてだぶ〳〵とあがくなり。されどもるぎれ
糸の短きに上帯をかけそ結ひきりとも。草摺のなぶれの
害にそなるめなり。古製は草摺のくみ限らず。胴も袖も裏
に革などをなくてくさぐ加へる事なく。のむちぐみあが
くやうにおもきる物なり。又古製は鎧の草摺ハ前後左右
都合四下アガなり。其内右の草摺は脇楯ワキダテに付てなり。胴の右
の脇をそ闕アケてなるゆゑ左ハ闕きる所を脇ワキ多くてふ
さぐれど。
又問云。古製ハ胴の右は脇をそ闕アケて作る。脇楯を以て其闕ある
所を常さぐやうにしきはハ何の爲ぞや。答云。俄なる時

鎧を早く著ぬ爲なり。古製の鎧は籠手をまとうがくて付
る事なく今世はいふなる籠手さんふ物を用ふなり。
先なるはなをまして左右は籠手はきし。緒を結ぶ直垂を著
し。四ツのくびを結ひ脇楯をなくて緒を結ぬ。是を小具足コグソクは
出立イテタチといふ。陣屋にく常に此躰なる居るなり。はなを俄に敵
なくしくせきる時ハは。鎧を取て肩に形ばかりけ著はだかて
なるなり何の手間も入らぬなり。近世の鎧は著にくゆゑ
手間なる事なり。
又問甲冑をるゑに事古より有るや。答云。きるし札サネとふ
事太平記などみも見えるをば古代なも有し事れるべし。然

ごとき鉄炮は世に渡り来れば矢軍なかりし時代の事なり。鐵炮は世に至て鎧をたぬきたるあるの事なり。矢はなくなりぬれども貫うげる事れし況や鐵炮は格にて矢は

ばかりを突きぬく勢なり。鐵炮をおし破りて貫く勢あり。矢はなく突たる勢けなるべし。鐵炮はくは押破りぬるなり。又遠くてぬけぬるも近けれどもぬく。火藥は分量輕くるぬけ

ぎたるも重くすれば抜く。鉛玉は多ぬけざるも銅玉はそぬく。銅玉にて勢けばるも鐵玉はそぬるなれば当れば三匁五分の筒はくるめしるぬるぬるぬ是はくたし

ぬる定なるべし。何れぎは玉は少もぬけざるやうに

せんぎおもぐ鎧の札は厚さ四五寸許はをべし。如此せば矢もぬくる事はなるべからず。然るべきやうに厚くせば著て働く事を知るべからば当れば鎧をきたるなれば

いふ事は愚癡なる事なく臆病の至なり。なるべく鎧ぬけばとも打たるるなれば死もやらばるべくなるべし。かるべし。

さるるなれば人に見せんよりは打ぬかれて忽に死したらむ方目なるべしなるべし。甲冑は紙にて作るべし。なるべく

ば火事場へ火を消す者草羽織を著て行くべし。草羽織は火にやけざるなるべしなるべし。火の粉れども防ぐ物なるべし是を著るべし。鎧を其意に同じ。さぐ

於れよりそれ兵刃矢石を防ぐはぞれ備なり。鎧をたのみ
まして少も創をかうむらざるべしと思ふえ浅はかしれ心な
り。甲冑を堅くするは事我好むよりまさる事なり。心堅うらぶまして為めに札の鎧著てぶけをまもる
らんいかでかぐるしかるべしと。

母衣問答

問云母衣は何の為ぞ懸るや。ちなみぐれ諸説あれども疑を
まさしぬ正説は如何。答云。母衣を古代はまぐ鐵炮渡らざる
時。城攻れぐる城中より雨のごとく矢を射かけるなり。近くし
てあるべきやうなれは母衣をかぶりて押よする事と見え

三代實録卷の本にて脱字ほり今白翁の校本を用ふ

信友云蝦夷國の事を譯者也右衛門といふ者其國に事故書たるものなり蝦夷人貞観十八年に蝦夷人の細工の紙一中伝中たるべし中木にて仕出中侵是に上る母衣をかけ矢除ぞ致備出云々信友按ずるにおのづから其用今きはり

ようり。鎧のうへにかぶりの下にかぶるなり付のはれあるも此時の用ぞ
ぞ。壒嚢抄に武士臨戰場時被縄以防敵矢と見え。又三
代實録卷十七清和天皇貞觀十二年三月十六日の御卷ぞ。對馬島主小野朝臣春風が
進せし起請ぞ起請とは願書なり。曰。軍旅之儲常在介冑介冑雖薄助
以保侶堅請縫造調布保侶衣千領以備不虞常見えあり。此文
の意は軍陣の用意は介冑ぞ。介冑は保侶の衣なり。
ひかぶりはそれにて以ん。保侶は母衣を以てよ
うのものをもかぶるなり。諸國より調物ぞと調
いふは年貢なり。納る布を以て保侶衣千領を千人前縫作て置て。不
慮ぞ三韓の外國より攻来る時はたちにいくさをとるとい

信友云今戦後の俗女の打掛衣は事をわろがるなれども古言なるべし

事なり。保侶にく介冑を助る事なれば保侶ハやうらかく物なるゆゑ矢を射うけても矢の勢ぬけて介冑を貫く事なからまほしなり。右の壒嚢抄主代實録の文を以て古代の母衣ハ用ひ方找考へ知はべし。後代鐵炮渡りて後ハ軍に弓矢を以て攻め防ぐ事疎(オロカ)まあり鐵炮を專ら用ふる事なれども。母衣をて矢を防ぐ事ハなれ多ハ故ほろハ何ゐなる物ゝ知まぬ事にはりて云ばはなはだしく邪説をいひふらしてうれり。後代母衣ゐる矢を防ぐ事絶(タエ)て無用の物なりゆゑ。古へよりて有て来ぬ物なれども捨てもなられぬ。籠(カゴ)ゐぶくろを包(ツツ)て負ふゐる指物の類になりてあり。

母衣ハ製古今の替りてあり。母衣の事を先年予ゞ著してある保呂衣推考といふ書ゐ委細に記し置さるバ。古てを略し多其大綱ばかりを擧て答ゐあり。

又問云。唐の國ゐも母衣を用ふる事あるや如何。答云。母衣ハ我國ハ用ひて唐にハ用ひざる物なり。或ハ母衣を漢の王良なりて始ゐ造ひ。或を張良より始るとなり。或ハ樊噲より始ゐあるといふ説あれども。唐ハ書ゐ見えざれ妄説なり。或ハ唐の旄(ボウ)といふ物を以て我國の母衣に引あてゝ説をなれども。牽強附會の説なれを取るに足らざるなり。

又問云。蘇子瞻といふ人は東坡居士とも號す宋の代の大儒なり。此人の著述多は殘儀兵的といふ兵書なり。其兵的の中に漢傑之儀といふ篇ありて其中に縄の事見えたり。然れど唐に母衣といふ事を書て。終に太公望を觀世音なり黄石公は摩利支天なりとれどいふに。又普門品などの文を引き所もあるて其文章の拙き事甚し。按ずに日本の愚昧淺學の出家などの作あらん。おのゞ作といふ人の信ぜざらむ事を恐れて蘇子瞻が名を借るなれば。文章の事は曾て知らぬ予が眼にあるもいとさはしく拙くおぼゆるなり。學者の眼子はけうときなれく屎ぶくぶ見ゆるかくるゐ偽作の書に見えたる事は取るにたらず。

武士學文問答

問云。武士は唯武藝をもて習ふばかり學文ふるに及ぶず。唐の事は知らずとも事かけず。詩を作り歌をよむれとなるに心ある人ゝ武道の害なるもありといふ人あり如何。答云。學文ふる主意は唐の事を知るべき為にもあらず。又詩を作り歌をよむ事は為ふもあらず。人の人ゝ

道を知て身の行ひを正しくせんが爲なり。それ人は五倫の道なり。五倫とは父子・君臣・夫婦・長幼・朋友是なり。この五倫の身に行ひ方を道といふなり。其道をくはしく知らんがために聖人の書をよく習ひ口釋を聞くを學文といふなり。其道を委しく知たりとも其道を身に取て行ひざるは學文せざるに同じ。其道を身に取行ふ人を善人といひ。五倫の道に背きわきまへざるを惡人といふなり。武藝とは何ぞと達したりとも五倫の道にもとづきたがへざる人のたぐひは禽獸(キンジウ)に同じかるべし。文武とは此二ツの文と武とはなるべきなり。武の道は人の所領國郡を奪ひ取るべき爲の道にはあらず。かの五倫の道に背き惡事をなし世の害をなる惡人を誅罰し亂をしづめむる爲に道あり。されば武田信玄のごとき軍を用ふる事を巧なりとは云へども學にして道を知らず。其父信虎を追ひ出し國を奪ひ取り不孝の惡名を後世に遺せり。恥なき事はなほやまざれば武士たらむ者學文せずして道を知らざるは武事に於ては多しとなすべし。

此一冊孫らゞ爲に記しぬ。年ふ雪降て老の身れ手のた
どゝ行るはたゝのひゝく書おゝりぬるを。ゝれ書を名ばけ
る冬艸をゝしふ。

安永七年戊戌十一月七日

伊勢平藏貞丈書

内閣文庫

四季艸七之卷大尾

絡石舍藏版

天保八酉年官許

江戸　須原屋茂兵衛
同　須原屋伊八
同　須原屋佐助
京都　上阪庄次郎
大阪　秋田屋太右衛門
若山　阪本屋喜一郎

發行
書林

国立公文書館
National Archives of Japan